

聖戰一年を迎へて

蘆溝橋事件に端を發した支那事變は、皇軍の赫々たる戦果によりて北支及び中支の樞要なる地帯を平定し、今や北に中華民國臨時政府を出現し、南に亦維新政府を成立するに及び又近く漢口を陥れんとしてゐます。征戦僅かに一ケ年にして此大業をなしつゝある皇軍に對して我等は唯感激の外ないものであります。直接に參戦しない我々も、我々の左右から筆を投じて征戦の第一線に立つてゐる同僚があり、既に勇戦奮闘して敵弾に倒れた名譽の肉親もあります。

然し我が聖戦の大業を完成するには前途尙ほ多難なるものがあると思はれます。政治も經濟も世界の大局を正視して、大日本國建國の國是を益々確立し、堂々と文化建設に進まねばなりません。之が爲には我工事技術も大に參加しなければなりません。

幸にして我が土木技術家としては北支建設總署の技監として先般工學博士三浦七郎氏一行數十名を送つたのであります。同一行は我國の中堅技術家でありまして、何れも一身一家を顧みず、日本の使命を果すべく建設の戰士として堅き信念の下に出發されたのであります。

創業の苦難は何處にもあります、三浦博士の一行が理想實現の事業も容易の事ではないと思はれますが、軍政當局との良き連絡あり一行各良く統制をとり相協力して此の先覺的使用の達成に努力されん事を祈るものであります。

昭和十三年七月

工事畫報社同人